



湯浅洋先生を偲んで

1926 - 2016

— ハンセン病のない世界に捧げた人生 —

湯浅 洋先生を追悼して

2016年9月7日、湯浅洋先生は、京都のご自宅近くの病院にてご家族に見守られながら静かに息を引き取られました。90歳でした。静かな情熱を持つ志の人であった湯浅先生らしく、その直前には、病床にあっても筆を進めていた自伝の最後の推敲を終え、また、開催を間近に控えた第19回国際ハンセン病学会北京大会へのメッセージを完成なさいました。1度目の1998年に次いで2度目の北京での開催となった同学会。1度目の第15回国際ハンセン病学会においては先生ご自身が学会長を務められました。

湯浅先生のハンセン病とのかかわりは、あるハンセン病患者者との出会いから始まりました。その友人の依頼により岡山の当時離島に開設されたハンセン病療養所内の高校で英語を教えることになったのです。その後、ハンセン病患者のための支援組織である藤楓協会の職員として迎えられましたが、国際ハンセン病学会会長などから「ハンセン病の仕事を続けていかないか」と勧められたことを機に、結核の療養のために一度は断念した医学への道をふたたび目指すことを決意。英国のエジンバラ大学、リバプール大学に留学して医学、熱帯病医学を学び、34歳にして医者としての新たなスタートを切るようになりました。卒業後に香港やネパールでハンセン病専門医としての現場での経験を積まれたのち、発展途上国を

中心に国際的なハンセン病制圧のために尽力される日々が続きました。ご自身が「ハンセン病化学療法（MDT）を世界に広めることが私の生涯の仕事だった」とのちに語っておられたように、1975年に笹川記念保健協力財団医療部長として就任以後、MDTの普及のため、30年間世界中を駆け巡られました。2002年にはハンセン病治療への多大な功績によりダミアン・ダットン賞*を受賞されました。このように先生は、有効な治療法への強い信頼でその普遍化を推進し、長年ハンセン病の制圧活動の最前線に立ち続けておられました。

若くして結核を患い、結核療養所生活を送った経験から、治療する側の医師や看護師の患者に対する態度にも関心を持たれていた先生は、「医者としていつも謙虚な気持ちを持ち続けたい」「患者の気持ちが分かる医者になりたい」という想いを持ち続けておられました。先生を知る誰もが口を揃えて、「先生はいつも誰に対しても分け隔てなく接し、回復者の方々に対しても思慮深く公平であり、助けを必要とする者には援助を惜しまれませんでした」と言います。ハンセン病専門家やハンセン病ワーカーが、自分たちの研究や活動の成果を発表する場所である、国際ハンセン病学会（第1回開催1897年於ベルリン）が大きく変わったのは、1988年のことです。この年、オランダのハーグで開催された第13回国



湯浅先生（左）と石館守三初代笹川記念保健協力財団理事長（右）

際ハンセン病学会で、初めて、当事者が科学セッションで発表する機会を得たのです。これはハンセン病の問題は、医学的な問題だけではなく社会的な問題でもあることを長く説き続けてきた湯浅先生が、ILEP（世界ハンセン病団体連合）のメンバー団体に積極的に呼びかけ、当事者の参加を可能としたためでした。この後の国際ハンセン病学会では、当事者の参加が加速されることになりました。

「いつか『らい菌』と人間が共生できる日が来るのではないかな。僕はらい菌はなくならなくていいと思っています。地上にあるものは、すべて、無意味であるはずがないし、無駄であるはずがない。らい菌があるということは、しかもこれだけ長く存在しているということは、それは何かきっと意味があることなんです。天然痘のように、菌までなくしてしまえば、ひょっとしていつか、それと似たような病気が発生しても、持っていた菌で研究することができない。反対に、もしかしたら、実はこれは使いようによっては、とても役に立つものに変えられるかもしれない。それを人間のエゴで、消し去ってしまうということはしてはいけないと思います。しかも、らい菌は進化してるんです、たぶん。人間にとって優しい菌だから、すぐに発症しない。最初は痛みも痒みもないというマイルドな形でしか症状が出ない。そもそも大多数の人は発症

しない。そんな病気はなかなかないですよ。ひょっとしたら、あと100年後くらいには、らい菌は進化して、もしも病気になったとしても誰も発症しないように変化していくかもしれません。らい菌にとってのミッションというのは、人間と一緒に、菌が末永く生き延び続けることです。だから、らい菌だって人間やその他の動物にとって害が大きければ、駆逐される可能性も高まるのできっと進化するはずですよ。私たちが考えていくべきなのは、らい菌をなくすことではなくて、らい菌が人間にとって悪さをしないようにすることなのではないかと思います」こんな言葉を残された湯浅先生。人類の歴史上もっとも古くから知られ、社会的烙印を生み出す病気として恐れられてきたこの病に対し、先生はハンセン病による医療的・社会的問題のない世界の実現を願い、ハンセン病と向き合う人間の未来に希望を見出しておられました。そんな先生の生き方や考え方は、これからの時代のハンセン病との向き合い方において大切なこと、決して忘れてはならないことが何であるかをわたしたちに教えてくれています。

（笹川記念保健協力財団 ハンセン病対策事業部）

※ダミアン・ダットン賞 (Damien-Dutton Award)

ハンセン病制圧のためのNPO「ダミアン・ダットン協会」(Damien-Dutton Society For Leprosy Aid) が、1953年に創設した賞で、賞名の由来はダミアン神父と神父に仕えた修道士ジョセフ・ダットンにちなんで名付けられた。毎年ハンセン病治療に業績を上げた個人、団体に授与される。

略歴

湯浅 洋(1926-2016)

1926年 京都生まれ
米国アマースト大学、国際基督教大学(ICU)を卒業後、
1966年 英国エジンバラ大学医学部卒業
1970年 英国リバプール大学熱帯医学コース終了
1970年～1975年 英国ハンセン病ミッション(香港、ネパール)勤務
1975年～1980年 笹川記念保健協力財団医療部長
1980年～2005年 笹川記念保健協力財団常任理事
1993年～2002年 国際ハンセン病学会会長
2005年～2012年 笹川記念保健協力財団顧問



奥左から時計周りで、湯浅先生、山口和子元常務理事、紀伊國献三会長、大谷藤郎元篠楓協会理事長、日野原重明名誉会長、笹川陽平日本財団会長

湯浅洋先生との思い出

先生とは7歳の年の差があるが、実は、ICU（国際基督教大学）での同期生でもある。正確には先生はアメリカのアマースト大学の卒業生であるが、ICUでの単位も認められたので、ICUの卒業生でもあるのだ。先生は初代総長の湯浅八郎先生の御子息であり、ICU時代には私とは殆ど接点はなかった。1974年の財団設立の時も、先生のことはあまり話題とならなかった。

財団設立後、初めての活動として、東南アジアのハンセン病対策国際会議の開催計画時、犀川理事から湯浅洋さんが、ネパールのハンセン病病院で奉仕しておられるので、是非、招待しようとなり、先生も久しぶりに日本に帰国され、ネパール代表として出席された。その時、あのネパール人はどうして日本語が上手なのかと話題になったことはよく知られている。財団は医療面で活動できる医療部長を求めていたのでお願いしてみると、その時のお母上の健康問題などもあり、色々な方にご相談し勧められて、1975年12月に財団医療部長として就任され、2005年まで30年以上、常務理事・医療部長として精力的に国際的な活動を続けられた。

先生は国際ハンセン病学会の会長をつとめられるなど、ハンセン病の世界的リーダーでもあり、そのため、財団の名と活動は短期間に世界に広まる事が出来た。特に石館守三初代理事長の「人道的で、かつ、科学的」という財団の基本姿勢を作り上げられたのは、先生のおかげである。WHOの事務総長になられたJ. W. リー（李鍾郁）先生が、西太平洋地域事務局のハンセン病専門官であった時、協力してハンセン病制圧の目標値を作られたのは、先生のアイディアであった。特にMDT（Multidrug Therapy）によって、ハンセン病の制圧が可能となり、先生の「MDT for All」の実現への努力は忘れることが出来ない。

今年8月、京都の病院でお会いした時にはしっかりと会話ができて、長い間の先生のご尽力に対して、せめてもの感謝を申し上げることが出来た。裕子夫人、娘の洋子さんに囲まれての穏やかな最期と聞き、先生のしめくくりの見事さに、改めてご冥福をお祈りしたい。



2013年、日野原重明名誉会長（最前列中央）の誕生会を兼ねた忘年会にて

笹川 陽平

日本財団会長、WHOハンセン病制圧大使

ハンセン病制圧目標は湯浅先生のアイディア

湯浅洋先生の人生は、すべてハンセン病との闘いに捧げられたといっても過言ではありません。特にハンセン病制圧目標（Elimination）の設定は先生の考えであり、この目標設定があったからこそ、各国政府ならびに関係者は一丸となってハンセン病制圧に取り組むこととなったのです。このことは、当時のWHO西太平洋地域事務所事務局長のハン・サンテ（韓相泰）先生が湯浅先生に対し、「ハンセン病制圧活動を推し進めるために何か良いアイディアはないか」と相談された結果生まれたものです。

湯浅先生が提案された人口1万人あたりの患者数を1人未満にするというハンセン病制圧の数値目標は、ほどなくWHOの目標となりました。私は、すべての国、すべての地域でこの目標を達成することを活動の基本としています。



笹川会長（右）と湯浅先生（中央）は様々なフィールドを共に訪れた

それが湯浅先生の長年のご貢献へのお礼の一つであると考えています。

S. T. ハン（韓 相泰）

世界保健機関(WHO)西太平洋地域事務所名誉事務局長

笹川記念保健協力財団 湯浅洋先生の訃報に接して、ご家族に深い哀悼の意を表します。

彼との仕事を通した付き合いの中で、世界のハンセン病対策にかける彼の献身ぶりには、常に心を打たれていました。

西太平洋地域だけでなく、世界レベルでの彼の一番重要な功績となった出来事についてお話したいと思います。湯浅先生は、西太平洋地域事務所の感染症対策担当メディカルオフィサーで、後のWHO事務局長となったJ. W.リー先生とハンセン病対策に取り組まれていました。私は2人に、西太平洋地域で制圧の兆しの見えない対策活動をいつまでも続けるのではなく、感染症対策という面から問題がなく、なおかつ達成可能なゴールを決め、ハンセン病対策の道筋をつけてはどうかと提案したのです。

湯浅先生とリー先生が出したハンセン病制圧の定義とは、「ハンセン病が公衆衛生上の問題とならない人口1万人当



ハン先生（左）との熱心な会話

りの患者数が1人未満となること」でした。我々は、西太平洋地域でのハンセン病対策の基準として、その数値目標を採用し、それが後に、WHOとすべての加盟国で世界的な制圧目標値として使われるようになったのです。

S. K. ノーディーン

ハンセン病制圧連盟会長、元国際ハンセン病学会会長

湯浅先生とは、35年を越える古い仲で最初にお目に掛かったのは1980年にジュネーブのWHO本部を先生が訪問された時でした。その3年前、当時私が勤めていたチングルプット（インド）のCentral Leprosy Teaching & Research Instituteに来られた際には、お会いできませんでした。

世界中のハンセン病ワーカーから笹川記念保健協力財団の顔として知られていた湯浅先生は、困ったことがあれば誰でも助ける用意のある人でもあり、相手の役職を問わずWHO、ILEP（世界ハンセン病団体連合）やその他のNGOメンバーと協力して仕事をこなされていました。WHOによる国レベルでのMDT（Multidrug Therapy）推奨だけでは問題は解決しない、必要なのは公衆衛生面からのアプローチであると考えられていました。私のWHO在任中、先生には常に力付けられましたし、かけがえのない友でもありました。

湯浅先生は、ハンセン病に関するあらゆる面でバランスの取れた意見を持ち、手を打たなくてはならない重要なポイントを認識し、新たに学ぶ意欲をお持ちの方でした。若い頃にハンセン病制圧とハンセン病化学療法の研究にも関わっておいでで、これが後年のハンセン病への関わりにおいて類を見ない貢献へとつながったことは、言うまでもないでしょう。

患者に治療を施すことがハンセン病対策だとの限られた見方をする医療従事者もいる中、先生は公衆衛生こそ必要であると認識されて、WHOが取り上げたハンセン病制圧運動の全活動を後押しして下さいました。あらゆる状況の患者が基本サポートを容易に受けられることが重要であると力説され、それはWHOのハンセン病制圧イニシアチブとも合致したのです。全ての未治療患者に手を差し伸べることを重要とした先生のご意見に私は心から賛同し、WHOと、笹川記念保健協力財団から助言を受けた日本財団との異例のコラボが生まれたのでした。

情に厚く、ハンセン病患者の援助について意見を求められれば、社会的、また経済的に困難の多い患者の役に立つようなアイデアを提案されました。また、様々な保健問題を抱えた国でハンセン病対策に取り組むことがいかに困難かを理解され「最短の時間で最大の効果を上げなければならない」と、時間と共にハンセン病への関心が薄れることを恐れられていました。

湯浅先生は、ハンセン病研究の第一人者であり、数々の議論のまとめ役でした。そして国際ハンセン病学会の会長を二期みごとに務められ、私が後任を務める栄誉に預かりました。加えて過去半世紀のハンセン病史を編纂された先生の偉業は素晴らしいものでした。

先生は、世界のハンセン病を激減させることに貢献した医療従事者の長として、永遠に人々の記憶に残ることでしょう。私は、ご本人またその友情を懐かしく思い出します。しかし今は、湯浅先生の人生とその偉大なる功績を祝福することといたしましょう。



ミャンマーにて。ノーディーン先生（右から3番目）、湯浅先生（最左）

ウェイン・マイヤーズ

元国際ハンセン病学会会長、元米軍病理学研究所微生物学部元会長

大切な友へ

私の記憶の中で、湯浅洋先生といえば、なんと言っても世界的なハンセン病問題対策への貢献者でしょう。初めて洋に会ったのは1970年代中頃、笹川記念保健協力財団からの一行がワシントンの軍病理学研究所を訪問した際でした。一行はハンセン病の根本的な対策プログラムを計画していました。

のちに、WHOと笹川記念保健協力財団との協働によって発展していくことになるこの対策プログラムについて、洋はゴールを決めるために、WHOや世界中で数多くの協議・討論を重ねました。「ハンセン病のない世界」なのか、または「ハンセン病とそれにまつわる問題のない世界」なのか、など、さまざまな協議がされましたが、わかりやすいシンプルなスローガンということで、「すべてのハンセン病患者にMDT (Multidrug Therapy) を」となりました。プログラムの作成期間中に、洋と私は、ジュネーブ、アメリカ、中国、日本をはじめとする様々なところで、心に残る有意義な議論を重ねました。

洋には、個々のハンセン病患者のことを考えると同時に、ハンセン病問題の世界的な側面を捉えるという能力がありました。

洋の率いた笹川記念保健協力



2002年ダミアンダットン賞受賞時 マイヤーズ先生（右）、湯浅先生（中）、裕子夫人（左）

財団は効果的な治療だけではなく、患者に生きる真の希望を与え、ハンセン病に苦しんできた人々の生活を一変させました。

現在でも、こうした取り組みは続いており、洋の静かな情熱は後続の手本となっています。洋が関わった全てのハンセン病患者・回復者、洋と知己の多くの献身的なハンセン病ワーカー、洋を知る者は皆、洋の死を心より悼んでいます。私も妻のエスターともども、洋に会えないことを寂しく思っています。

マルコス・ヴィルモンド

国際ハンセン病学会会長

もうずいぶんと以前のことでありますが、湯浅先生が議長をつとめられたジュネーブでのWHOの重要な会議のことを思い出します。私のような若輩者は最後列に座って、国際ハンセン病学会の重鎮たちの話に耳を澄ませていました。私が強く関心を覚えたのは、この議長をする瘦身の物静かな男性でした。その方は重職にありながら、常に優しく控えめな態度ですべての出席者と接していました。

その何年後、中国で開催された1998年の第15回国際ハンセン病大会の開催中に、湯浅先生は会場内の部屋に私を呼び入れました。不安でいっぱいな私に向かって、先生は、いつものように穏やかに、しかし単刀直入に、私を次期ILA(国際ハンセン病学会)のアメリカ地域副会長に推薦したいこと、についてはブラジル開催の第16回国際ハンセン病学会の開催を頼めるか、と聞かれたのでした。

アメリカ地域副会長もブラジル大会も、私でいいのかどうか迷うところもないわけではありませんでしたが、その申し出を受け、先生への尊敬と感謝の意を表すような立派な大会を作り上げると申し上げました。先生のご期待に応えるこ

とができたと思います。

それから暫くしてパリで、夕食に招かれたことがありました。その時に、先生の生まれ故郷である京都の本をいただきました。花に囲まれた庭園、静かなせせらぎ、穏やかな風景などの美しい写真を眺めているうちに、ようやく湯浅先生の内面が理解できた気がしました。病を得た人々への深い敬

愛、ケアに対する無限の献身、また、特に際立った、静かながら力強い物腰で人を導く才覚。それらはすべて頂いた本にある穏やかな京都の姿そのものでした。

先生のご功績に思いをはせると同時に、ご冥福を心より祈ります。



2002年第16回国際ハンセン病学会ブラジル大会にて。ヴィルモンド先生（前列左）、湯浅先生（前列右）

湯浅洋先生 - 声なき者たちの代弁者

ハンセン病について耳にしたことは幾度もありましたが、勉強もしました。でも「ハンセン病」という言葉が明確な意味を持つようになったのは、1990年代も半ばになってからのこと。湯浅洋先生という献身的で控えめな医師のおかげでした。この聖書やコーランの時代から軽視されてきた感染症によって苦しむ人々を救うため、湯浅先生は人生を捧げられました。

先生と出会う前からハンセン病については、米国やイギリスのロンドン大学衛生熱帯医学大学院及び熱帯病病院で医学を学ぶ際に教科書で勉強していました。米国疾病予防管理センターからアフリカのサブサハラに派遣されていた1970～1980年代には、重度の障がいを持つハンセン病患者も目にしました。早期に診断され、きちんと治療されていたら治ったはずの人たちです。

しかし、私は湯浅先生に会って初めて、この病気がもたらすものを真に理解することができたのです。病気だけではなく、偏見や差別のために、一度この病気にかかると、病気が治った後も苦しみ、孤独にさいなまされること、重度の障がいを持った人は、非人道的なコロニーと呼ばれるハンセン病患者・回復者の定着村で暮らすことを余儀なくされ、治った後も残る障がいと共に生きなくてはならず、それが苦しみや孤独を増すこと。助けを必要としている人への熱い想いを持つ湯浅先生がいたからこそ、私は本当の意味でのハンセン病を理解することができたのです。先生は、ハンセン病患

者の苦しみを自分のものとして、少しでも彼らの人生がよくなるように尽力されました。一人でも多くの人と障がいに取り組むことが、湯浅先生の願いだったのです。

WHOでは、長年にわたり先生と一緒に働かせていただきました。その間、先生はハンセン病ワーカーに、重要なのは早期診断と治療ばかりではなく、治療の後に、家族や友人と故郷で暮らせることであり、社会復帰できることである、と常に説き続けていました。ハンセン病にかかってもかからなくても、それは誰もが享受すべき権利であるからです。

湯浅先生は、ハンセン病の分野でNGOの役割の大切さ、とりわけ以前先生が会長をされていた国際ハンセン病学会(ILA)の重要性を語られました。また、笹川記念保健協力財団をはじめ様々な国や団体の尽力によりハンセン病が激減している今こそ、ハンセン病対策に関わっているILAその他のNGOと協力することが必要だと私や周囲の者たちを説得されました。ハンセン病制圧への最後の1マイルのために湯浅先生は生涯を捧げられたのでした。

湯浅先生は、この不平等な世の中で平等が不可欠なことをよく御存じでした。そのことをハンセン病を患った人を助け、ともに歩むことで示されました。かつて声を発することができなかったハンセン病を患った人々は、湯浅先生の逝去を心より悼んでいることでしょう。



一人一人の患者に丁寧に向き合う

グレース・ウォレン

元英国ハンセン病協会(TLM)副会長・医療部門責任者

このところ体調が優れないとは聞いていましたが、湯浅洋先生が亡くなられたことは残念でなりません。

洋は1958年に日本で開催された国際ハンセン病学会で通訳を勤めたことで、ハンセン病を深く知るようになりました。世界中の様々な団体から集まった、ハンセン病を治癒し、ハンセン病問題を無くそうと尽力する人々に出会ったのでしょう。洋は困っている人を助けられるかもしれないとイギリスで医学を学び、一通りの勉強を終え、ロンドンに本部があり、世界各国で活動をしている英国ハンセン病協会(TLM)に職を求めました。

1960年代後半、洋はTLMが運営していた、香港のヘイリンチョウ島にある、国立ハンセン病病院にやってきました。私は、そこの医療部門の責任者で、確か数か月間、洋は私の下にいました。

洋はそこで、様々な病型のハンセン病、また進行度の違いや治療の経過による変化などを診ました。また、らい菌検査による病理診断もできるように、研究室で診断検査についても学びました。私たちは皮膚スミア検査でらい菌の数を録り、治癒の指針としていました。また、リハビリや、手足の機能維持のための理学療法の基礎、それから、これは患者に障がいがあっても身の回りのことができるように教えることですが、作業療法についても体験しました。実習では、機能を回復し自立を促し、社会的にも受け入れられやすくするための形成外科手術の助手も務めました。我々はインド以外で、そういった手術を日常的に行っていた最初の病院でした。

洋との時間は非常に楽しいものでしたし、その先、洋が各国のハンセン病対策を行う上で十分な経験を与えることができたと思っています。



1960年代後半ヘイリチョウ島にて

ます。もちろん、洋が1970年代80年代と笹川から派遣されて世界中を訪れるうちに、学びや研究、教えはより深まっていったことと思います。

数年後、ネパールのカトマンズ近くのアナンダバン病院で、そこの院長となった洋と再会しました。私はその頃、患者を外国に移送したり、海外でスタッフを教育したりするのではなく、その地域で得られる資源を使って患者を診られるようなスタッフ教育をしていましたので、アナンダバンにもリハビリ手術の支援のために行ったのです。

その後、20年以上にわたって、洋とは、ハンセン病病院や国際会議で何度も会いました。もちろん、笹川記念保健協力財団は我々のプログラムを支援してくれていましたので、そういった繋がりもありました。

近年は彼も私も引退して、それほど交流はありませんでしたが、洋の訃報に触れ、困っている人々を救うことに生涯を捧げた、真の戦士をなくした悲しみに耐えません。

ありがとう、洋。

エルウィン・クールマン

世界保健機関(WHO)世界ハンセン病プログラムチームリーダー

WHO世界ハンセン病プログラムより、ハンセン病制圧に長年携わった友人であり同志である湯浅先生のご逝去に心からお悔やみ申し上げます。

湯浅先生は、人類の歴史で最も恐れられた病気のひとつであるハンセン病の制圧に、生涯の大半を捧げた一人でした。先生に直接にお目にかかる機会のあった人は、公衆衛生の専門家として、草の根レベルの医療従事者から、研究者、公衆衛生専門家、活動家、保健省高官まで、最前線で働くすべての人と共にあった先生の姿を忘れないでしょう。病気としてのハンセン病の取り組みだけではなく、ハンセン病の

患者や回復者、その家族のニーズも大きな問題として考えていらっしゃいました。

WHOは湯浅先生の長年にわたる協力に深く感謝しています。世界的レベルでも、地域レベルでも、ハンセン病制圧の枠組みを作ってきた先生が残された功績は非常に大きく、ハンセン病関係者は、先生の功績の恩恵を、今後も長く受け続けることでしょう。

先生のご冥福を祈ると共に、ご家族、ご友人、同僚の皆さまに、心よりのお悔やみを申し上げます。

われわれに未来を啓いてくださった 湯浅洋先生を偲んで

私が湯浅先生にはじめてお会いしたのは1957年5月ごろだったと思います。60年前のことなのに、先生にお会いしたときの記憶は昨日のことのよう鮮明に蘇ります。長島愛生園に患者のために新設された、岡山県立邑久高校新良田教室3年生の時でした。定時制普通課程の変則的な高校で、4学年用の教室も建設半ばで、講堂もなく、学園としての装いは未完のままでした。地域交流もほとんどなかった時代です。すから、本校はじめ近隣高校との交流ありませんでした。ある日、愛生園の大病院自治会長で知られる田中文雄〔本名鈴木重雄〕さんから、東京の国際基督教大学（ICU）卒業生の湯浅洋さんが英語を教えるからと、希望者を募る呼びかけがありました。東京の大学生や高校生に出会ったことのないわれわれにとっては、興味深く、刺激的で、得がたいチャンスでしたから、私は級友数名と誘いあって参加しました。1、2年生も数名加わり、12名ほどの希望者でした。

湯浅先生は都会的なセンスと品の良さ、育ちの良さを髣髴させる憧れのすてきな好青年でした。人間味あふれる優しさでわたしたちを包み込むようにして、分かりやすく丁寧に英語を教えてくださいました。わがクラスの中で群を抜いて英語が強かったT・Y君は、大学進学を目指して励んでいました。私はその時点では大学進学を決めてなく、テニスや卓球などに打ち興じていました。翌1958年、最終学年の4年生になって、

菌検査もマイナスに近付いていたので、社会復帰する場合、就職か進学かで悩んでいました。が、肉体労働は無理だろうと、デスク・ワークのサラリーマンを夢みて大学進学を決心しました。1959年卒業後、無二の親友であった全生園出身のT・Y君とO・H君から誘われるままに全生園に転園し、3人で受験勉強に励んでいました。

英語にめっぽう強かったT・Y君は、父親がハンセン病療養所に入所していたため経済的に厳しく、国立大学にしか行けないという事情にありました。そう言う事情を知った湯浅洋先生はご自分のポケットマネーで有能なT・Y君にICUを受験させたのです。ところが、数学の入試問題も英語で設問され、英語で答えなければならず、さすがのT・Y君も不合格で、英国の宣教師の斡旋で東京のある教会の守番として就職し、社会復帰していきました。

1962年にO・H君は東京理科大学数学科に、私は慶応法学部法律学科に合格することができました。O・H君は郷里の佐賀県で高校の数学教師として、私は都内の信用金庫に就職しました。大学でも職場でもハンセン病のことは隠して生きていましたから、ストレスと無理が重なって4年後にハンセン病が再燃。1970年に全生園に再入所せざるを得ませんでした。リファンピシンや、ダラシン、アセタミンなど過量服用したため副作用で全身激痛が襲い、1.5の視力があつた右目は虹彩炎と緑内障を併発し、7年間で失明してしまいました。



2010年、故鈴木重雄氏の故郷、気仙沼を訪ねて



1996年。森元氏（前列中央）と湯浅先生（右）。40年ぶりの再会の場。美恵子夫人（後列）と山口元常務理事（左）も一緒に

私が闘病生活で苦しんでいた1972年に、鈴木重雄さんは故郷気仙沼市唐桑町町長選挙に立候補し、洋先生のご尊父、湯浅八郎先生（ICU創立者）が流行歌手の大御所、渡辺はま子さんを引率して、鈴木さんの応援演説に駆けつけていらっしゃったのです。このことは、らい予防法廃止問題すらタブー視されていた時期の療養所の入所者には、信じられないような出来事として驚愕を与えました。長いハンセン病の歴史の中で、完璧にカミングアウトを果たしたのは鈴木重雄さんが第1号ではないでしょうか。私などは1970年に再入所して1996年の予防法廃止までの26年間は、親兄弟以外はすべての縁を断ち、静かに生を終え園内の納骨堂に入るのを可と決めていました。1993年に自治会長になり、予防法廃止運動に関わっていくうちに少しでも鈴木さんのつめの垢でも煎じて飲みたい、という気分が変わっていきました。そんな折、笹川記念保健協力財団の山口和子さんの労で40年ぶりに都内のレストランで湯浅先生と再会できたのです。

1997年、ニューヨークの国連本部で開催されたハンセン病の制圧と回復者展「尊厳を求めて (Quest for Dignity)」に私たち夫婦が日本代表として参加させていただき、そのオープニング・セレモニーで私が英文で挨拶する大役を担いました。壇上では湯浅先生が流暢な英語で、私たち夫婦のことを紹介してくださいました。私の挨拶文は山口さんに英訳してもらい、読む練習をしたのですが、視力の弱い私にはパソコンの文字は見にくいので、ニューヨークにつくまでの12時間ほとんど一睡もせず、筆ペンで大学ノートに書き変えて朗読練習をしました。大半は山口さんに代読していただきましたが、朗読が終わると暖かいスタンディングオベーションに、私はしばし夢のような世界に浸っていました。私はそのときはじめて各国IDEAのメンバーと会い、多くのことを学ぶことができました。

国内の国賠訴訟問題が結審した翌2002年に全生園を退所。2004年、NPO法人IDEAジャパンを設立して湯浅先生や山口さんのご協力もあり、IDEAジャパンを大きく発展させることができました。インドや南アフリカ、ブラジルなど国際ハンセン病学会に参加した折にも、世界のトップリーダーとして、湯浅先生はいつも優しく声を掛けてくださり、励ましてくださいました。1998年の北京国際ハンセン病学会には洋先生の奥様裕子夫人も参加され、万里の長城の急階段を共に登ったことも忘れられない思い出です。

長年、国際ハンセン病学会の長としてご尽力された湯浅洋先生のご逝去を、世界中の快復者や関係者が悼んでおります。先生との出会いがなければ、われわれハンセン病の快復者は、今日のような希望のある人生未来を啓くことはできなかったことでしょう。先生との出会いを永遠の誇りとして、今後の人生の糧にしたいと思います。先生の世界ハンセン病のための長年のお働きに、心より感謝を込めてみ霊の平安をお祈り申し上げます。



南アフリカ喜望峰にて。前列左 湯浅先生、その右隣に森元夫妻

山口 和子

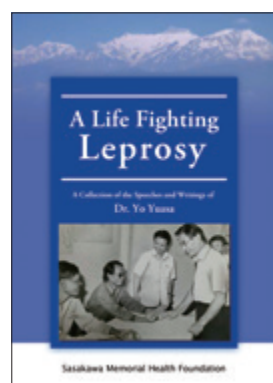
元笹川記念保健協力財団常務理事

なだらかな東山連邦を見晴らす8階の病室に湯浅洋先生をお訪ねしたのは、京都の夏にしてはさわやかな空がひろがった8月22日の午後でした。やや起こしたベッドの背にもたれた先生の様子が、昨年5月に東京でお目にかかった時とさほどお変わりがなかったことにホッとしながら、翌月に予定されていた第19回国際ハンセン病学会（北京）に向けてのメッセージの話などをいたしました。この直前に、昨年刊行しました湯浅洋言集「A Life Fighting Leprosy」についての英国のポール・ファイン教授の書評が掲載されたレプロシー・リヴュー誌が届きましたので、数ページの書評を大きく拡大コピーして持参しました。常に手厳しい批評家でもあるポール・ファイン教授と先生は旧知の間柄。早速コピーを広げて読み始められる様子は、世界の保健問題の最前線でハンセン病制圧の戦略を担う一人であった湯浅先生の表情に一瞬戻られたと思わせる瞬間でした。

＊

湯浅洋氏も、その人生でハンセン病に「出会った」一人でした。終戦後間もない20代での出会いー長島愛生園での鈴木重雄氏とーが後に第7回世界ハンセン病学会（1958年東京）事務局への関わりにつながり、そこで世界のハンセン病学会の時の指導者たちーウェード、ミュアー、ロス・イネス、そしてフォレローやジャガディサンーとの出会いにつながりました。学会終了後の一年間をついやして議事録の編集をやり終えた時には、世界のハンセン病問題の全体像を把握することとなり、医師をめざす自らの将来を迷うことなくハンセン病に焦点を当てていたのです。

1975年、当時ネパールでNGOのハンセン病病院の院長であった湯浅洋氏を迎えたことは笹川記念保健協力財団にとって大きな幸運でありましたが、同時に湯浅氏個人にとっても極めて重要な転機であったと思います。1940年代のサ



ルフォン剤の出現で世界はハンセン病克服が現実のものとなったかと思っただもつかの間、1960年代後半には薬剤耐性という暗雲が立ち現われており、次なる対策を早急に打ち立てなくてはならな

2015年発行、湯浅先生発言集
「A Life Fighting Leprosy」

い危機感に満たされていました。そこに石館守三博士という薬学の専門家を指導者とする母国の財団から、世界のハンセン病問題を科学的な手段で解決しようというミッションへの参加を求められ、しかも笹川良一氏というこれまたハンセン病者の救済に人道的な深い思いを抱く指導者の支援が背後にある、という千載一遇の機会が訪れたのです。

それからの30年間は、「ハンセン病を制圧しよう！」という世界の保健衛生分野で前例のないチャンス「A Window of Opportunity」が生まれたと言っても過言ではありません。WHOにはハンセン病特別研究班が生まれて新しい薬剤処方の開発が進み、従来から患者救済に熱心であった国際的NGOの連帯組織（ILEP）も「すべての村のすべての患者に治療を！」をスローガンに採用して、ハンセン病蔓延国の政府とも連携してフィールド活動を重視する方針へと転換して行きました。このような世界のうねりの中で湯浅洋氏は、笹川記念保健協力財団、日本財団の使命を背景に、国際機関、専門医・研究者、途上国政府、民間NGOのいずれにも存在感をもって受け入れられ、責任ある役割を果たしました。WHOにおいてはハンセン病専門家諮問委員、ILEPでは医療専門委員、そして国際ハンセン病学会では通算15年間にわたり事務局長から会長をつとめました。これは、SGブラウン、SKノーディン、MLルシャ、Wマイヤース、Cマクドゥガルなど国際的な専門家をはじめとして、それぞれ蔓延国のフィールドでともば闘った「ティーラ・ラマスータ（タイ）、アディヤトマ（インドネシア）、ギント（フィリピン）などの指導者との同志的結束なくしては成り立たなかったことで、湯浅洋氏はまさにハンセン病の世界的制圧のためのまたとない機会「A Window of Opportunity」を生かし成果を残す同志の一人となったのです。

これにはいくつかの原則がありました。それはハンセン病対策がその国の保健活動の一環となる。つまり住民に最も近い末端の保健所の活動の一部となるということで、湯浅洋氏が繰り返し強調したことでした。従来型のNGOが優れたハンセン病医療を限られた場所で行う一方で、それ以外の場所では治療はおろか診断の機会もないという状況を変えることであり、すべての村のすべての患者にハンセン病の診断と治療を届けるということでした。そのためには、病型の分類や診断法の簡略化や3種の薬を組み合わせた複合化学療法

(MDT)の薬の服用をしやすく改善していくことができました。MDTの4週間処方パッケージとして、日々の服薬の状況を可視化するMDTプリスターパックの発想もこの一つで、湯浅氏の提唱でフィリピンのフィールドで試験的に導入され、その後世界に広がったことはよく知られています。

世界には、保健医療サービスが届かないところに生きる人々も少なくありません。その場合でも不明のまま放置するのではなく、一度は患者調査をし、発見と同時に治療をする特別プログラムも湯浅氏が責任者として進められたものでした。ただし、無医療地区にハンセン病患者だけを探しに行くのではなく、結核など広く人々の健康の脅威である疾患にも同時に対応するべきだというのが湯浅氏の主張であったことを印象深く記憶しています。

ちょうどこの頃、日本のある形成外科医の方から、ハンセン病の後遺症である手指の形成外科治療に奉仕したいので途上国に派遣してもらえないか、という相談がありました。その時の湯浅氏の回答は「一人の患者に対する手指の矯正術の費用で5人の新患を発見し治療することができます。今はこれが優先されるべき時です」というものでした。

1980年代以降、全世界で1,700万人以上の人々がMDT治療を受けてハンセン病が治ったとされています。The Window of Opportunity は大きな成果を上げたことは疑う余地がありません。2000年代の半ばまでには多くの国で制圧目標が達成され、各国でハンセン病対策の優先度は次第に後退していきました。その後の10年、全世界の新患数は25万人前後で推移し期待ほどの減少が見られていません。しかしこの現実、湯浅洋氏とその同志たちにとっては当然ながら想定内の事象であり、これからの時代こそILEPなどハンセン病をテーマとするNGOの役割が重要になる、と早い時期から述べられていました。

1998年、第15回国際ハンセン病学会（北京）の最終日、2期目の会長に再選された湯浅氏は、学会長としての挨拶のなかで「ハンセン病のない世界へ」から「ハンセン病にかかわる医療的・社会的問題のない世界へ」という命題に転換していく必要があると述べています。これは一つには、ハンセン病をなくそうと、政府を含め全世界にうねりを起こした時代は遅かれ早かれ過ぎていくということへの認識であり、いまひとつは、ハンセン病が身体に後遺障がいを残すおそれのある疾患であり、それ故に社



1996年、中国広東省紅衛村のハンセン病回復者村にて

会の差別と排除の対象となる。これは今もこれからも変わらない。ハンセン病は複合的な問題をもつ疾患であるという認識を共有しようという呼びかけであり、湯浅氏の自らの出発点への回帰でもあったと思われます。この命題をとおして湯浅洋氏は、ハンセン病当事者運動との接点をもち、さらには世界のハンセン病の歴史の記録・保存にも積極的な取り組みを呼びかけました。

「病原菌は人類が創造したものではないが、偏見や差別は人間がつくったもの。我々人間が克服出来るものであるはずだ」という言葉の中に湯浅洋氏のハンセン病観が現れているように思います。

＊

30年以上にわたり身近に接した湯浅洋先生は、しっかりと自分の世界を持ちつつ不快な感情は他人には見せない修練された方でした。それでいて育ちの良さがそここに感じられるほほえみさも備えた紳士でした。なによりも先生を通して、アジアやアフリカでのフィールド経験を経て世界のハンセン病対策をリードした指導者たちに接する機会を得たことは貴重な体験でした。また陽の当たるプログラムとなったハンセン病対策に生き生きと取り組むフィールドの人々に出会えたことも大きな喜びでした。その先に、病を生きた当事者たちの人生に接する新たな場面が展開するのですが、湯浅先生の時代はそれへの助走でありました。

湯浅洋先生との最後の仕事在北京のハンセン病学会に送るメッセージであったことは、私には忘れられない思い出となりました。原稿はファックスで先生のご意見をいただいて、9月6日に現学会長と中国側の学会組織委員長あてにメールでお送りしました。その日の晩、思いがけなく裕子夫人と電話でお話する機会があり、先生に直接ご報告申し上げたのが最後になりました。

湯浅先生、長い間ご指導を賜りまことにありがとうございました。心からご冥福をお祈り申し上げます。

ティーラ・ラマスータ

ラジ・プラチャ・サマサイ財団理事長

湯浅先生の思い出、タイの友人より

敬愛する湯浅先生のご逝去を聞き、タイでハンセン病対策に関わっていた私と同僚は深い悲しみに包まれました。先生のご家族および笹川記念保健協力財団と共に、湯浅先生を偲び長年にわたるハンセン病への貢献を思い出します。

今年85歳を迎える自分の生涯の半分以上を湯浅先生と歩んでまいりました。笹川記念保健協力財団とWHOにおけるハンセン病制圧活動に先生が無私無欲で身を捧げられ、具体的かつ持続可能な成果を世界にもたらしました。また、タイにおいては、湯浅先生は、1970年代前半からタイ国王陛下の主導下のプロジェクトとして行われたハンセン病制圧の基礎を築いた先駆者のひとりです。

公衆衛生上の問題としてのタイのハンセン病制圧は1994年には成功裏に達成され、2011年にはWHOが持続可能な



タイにて、ティーラ先生と一緒に（左から2人目）

制圧状況にあることを宣言しましたが、それらは湯浅先生の貢献に大いに負うものです。先生の生涯を通じての功績は、タイにいる先生の仲間たちにとって忘れがたき記憶として永遠に留められることでしょう。

敬愛する湯浅先生が安らかに眠られますようお祈り申し上げます。

チャン・ハウ・カン

ベトナム皮膚科学会代表、元国立皮膚科学研究所所長、元ハンセン病国家対策プログラムディレクター

偉大なる友人、湯浅先生を偲ぶ

笹川記念保健協力財団の元常務理事・医療部長であった湯浅洋先生は、1980年から2001年にかけて、ベトナムのハンセン病対策国家プログラムにも大いに貢献されました。20年以上にわたり、治療、障がい予防、リハビリ等、さまざまな活動への協力のため、ベトナム国内のいくつかの省や都市を訪れました。先生の率先した取り組みはハンセン病制圧の成功に貢献しました。どこを訪問されても素晴らしい印象を残された先生ですが、特に、回復者とその家族・親族は感銘を受けていました。先生は、患者・回復者やその家族の人権問題についてよくお話をされましたが、この話を聞き一般社会の人々の当事者に対する態度が変わったことも記憶に残ります。先生は誰に対してもわけ隔てがなく、大変思いやりがある方でした。

我々のハンセン病制圧プログラムに対する、笹川記念保健協力財団のご支援と湯浅洋先生の献身に深い感謝の意を表したいと思います。

先生と何度か一緒に過ごす機会があり、いろいろなことについて議論をしたことは、大変楽しい思い出です。先生の教えと思ひやりは私の人生に大きな影響を与えました。先生から学び、共に働いたことは、私にとって栄誉であり誇りです。

湯浅洋先生の優れた功績はベトナムのすべての皮膚科学者とハンセン病学者が認めるところですが、その医学的貢献と共に、先生を知るすべての人が、際立った医者、傑出した人物、そして偉大な友人として先生のことを思い出すでしょう。



ベトナム保健省ハンセン病責任者ル・キン・ドゥエ先生と。共に制圧を目指した

チョウ・リン

元ミャンマー保健省ハンセン病対策副ディレクター

湯浅洋先生が初めて我が国を訪問された1979年6月、ハンセン病制圧国家プログラムは危機的状況に陥っていました。その理由は、

- a. 1956年来、我が国へのダブソン剤の主要供給元であったユニセフが、支援から手を引こうとしていた。
- b. 治療が必要なハンセン病患者数は20万人を上回り、さらに多くの新たな患者が診断されていた。
- c. 長期にわたりダブソン剤を服用していた患者のうち、年間3%にダブソン剤に対する耐性が見つかった。
- d. 国民保健計画1978 - 1982が導入され、特別な病気の対策は、一般保健サービスに統合された。

WHO南東アジア地域事務所の地域事務局長であったコー・コー先生のアドバイスに基づき、日本船舶振興会（現日本財団）と笹川記念保健協力財団は、ミャンマーのハンセン病対策の支援の検討を始めました。その先頭に立ったのが湯浅先生でした。支援は決定され、ダブソン剤600万錠と他の資材の提供が始まりました。

先生はハンセン病患者を診察し、ハンセン病のフィールドワーカーや医療ディレクターと話をし、我々が直面していた問題について理解を深められました。先生の助言に基づき、笹川記念保健協力財団は、ダブソン剤や他の資材の支援を決めたのです。

また、湯浅先生はILEP（世界ハンセン病団体連合）の他の団体にも我々の窮状を伝えられました。その報告を聞いたILEPはミャンマーのハンセン病対策プログラムに関心を持つようになり、支援が入るようになったのです。1995年にはミャンマーのハンセン病対策活動は最大の盛り上がりを迎え、2003年には公衆衛生上の制圧という目標を達成しました。

笹川記念保健協力財団が開催した研修ワークショップ、セミナー、共同会議には、ミャンマーからも多くが参加いたしました。

今でも私の記憶に残っているのは、1979年1月20日に湯浅先生が我々に書かれた手紙です。その手紙で湯浅先生は、笹川記念保健協力財団は、追加のダブソン剤を送ることと同時に、WHOと笹川記念保健協力財団以外の、ILEPをはじめとする他の国際団体にも働きかけ、ダブソン剤およびクロファジミンやリファンピシンのような抗ハンセン病薬を入手することを勧められ、ミャンマー政府はこの勧めに従いました。また、バンコクでのハンセン病対策研修ワークショップに参加していたティン・シュウェ先生をはじめとするミャンマーからの研修者はレベルが高いことから、他国の研修者よりもミャンマーの研修者がワークショップで多くを吸収していると書いてくださったことも、嬉しい思い出です。

思い出は尽きませんが、この短い文章からも、湯浅先生がこの国のハンセン病制圧にかけた熱意と情熱がお分かりいただけるのではないのでしょうか。先生のご尽力に心から感謝いたします。

湯浅先生はミャンマーのハンセン病施設を何度も訪問されました。先生が引退される直前に、笹川陽平日本財団会長とおいでになったのが、最後の訪問となりました。その最後の訪問時には、引退後に奥様をミャンマーに連れて来て国を見せたいとおっしゃっていました。楽しみにしておりましたが、奥様の体調が良くなかったため、それは叶いませんでした。

先生は逝去されましたが、未永く記憶に留まることでしょう。湯浅洋先生が安らかな眠りにつかれますように。



1996年、ミャンマーのフィールドにて



美しいミャンマー

兄あるいは伯父のような湯浅洋先生

私は1979年、アジアでハンセン病対策に関わる人を対象とした第2回ワークショップに参加しました。私にとって初の海外渡航であったこのワークショップで、穏やかで心優しい湯浅先生に初めてお目にかかりました。先生は、いつも笑顔絶やさず、若手の言葉にも耳を傾けてくださいました。

ミャンマーのハンセン病対策国家プログラム本部で医療部長として働いていた同年の後半、湯浅先生はハンセン病対策活動視察のため、ミャンマーに来られました。当時は抗ハンセン病薬の主たる提供者だったユニセフが、プログラムから手を引こうとしていました。治療薬が手に入らなくなるかもしれないという危機的状況を救ってくださったのは、湯浅先生でした。笹川記念保健協力財団が、ダブソン剤を供与してくれることとなったのです。

その後数年にわたり、プロジェクト評価、会議など、何度も我が国を訪れました。プロジェクトに関わる全ての人と関係を深め、我々の置かれた社会的・政治的な状況、問題、制約とハンセン病対策への我々の努力を理解され、笹川記念保健協力財団あるいは他のILEP（世界ハンセン病団体連合）メンバーから技術的および物質的な支援が届くよう、いつも手伝ってくださいました。ハンセン病対策課の我々にとって、先生は偉大な兄のようでした。

1994年、ハンセン病の歴史の中でも歴史的な会議となったハノイ会議で、先生に再会し、ミャンマーでのハンセン病制圧に向けた夢やビジョンを語り合いました。プロジェクト支援を確立するためのドナー会議を開催することを、湯浅先生はS.K. ノーディーン先生と共に提案されました。この会議は1995年4月にヤンゴンで開催され、ILEPパートナーである、アメリカハンセン病協会(ALM)、オランダハンセン病協会(NLR)、笹川記念保健協力財団、英国ハンセン病協会(TLM)が出席し、WHOと手を携えて、湯浅先生の提案や助言を取り入れながら、ハンセン病対策活動の強化を行いました。当時私はプログラムマネージャーを務めており、湯浅先生はその部門の同僚にとっては伯父のようでした。

湯浅先生からはそのプログラムでご支援いただいただけでなく、私が2000年までWHOで働くことができたのも先生のおかげです。

私は、保健省およびWHOから離れた後、ALMに加わりミャンマーでのILEP 渉外担当になりました。この時も、私がWHOやILEPなどの会議に参加するといつでも、私の兄は私を支え、励ましてくれました。

会議、フィールド訪問、ハンセン病回復者の診察など、さまざまな場で、先生が回復者と話をしたり、手を取ったりする際の、その接し方には多くを学び、先生は今でも私の手本です。

奥様をミャンマーに連れて行き、豊かな文化とホスピタリティのある黄金の国を見せたいと、湯浅先生は願っていましたが、残念ながらそれが実現することはありませんでした。2005年に笹川記念保健協力財団の招へいで来日しました際に、先生が京都で私をもてなしてくださったのも、良い思い出です。

我々の兄であり伯父であった先生はお亡くなりになりました。私個人だけでなく、ハンセン病対策プログラム、および世界のハンセン病制圧にとって、この喪失はあまりにも大きいものです。しかし我々の心の中に先生は残っています。

安らかな眠りにつかれますように。



1995年ミャンマーにて。ティン・シュウェ先生(左端)、湯浅先生(右端)

シーザー J. ヴィアルド

元フィリピン保健省ハンセン病対策プログラムMDT (Multidrug Therapy) コーディネーター

湯浅先生には大きな借りがあります。フィリピンで最初に使われたMDTのブリスターパックを考案したのは、湯浅先生ではなくて自分であるという、他の医師の主張の過ちを正すことができなかったことです。

湯浅先生が出席したハンセン病関連会議で、MDTの薬剤の1つ、ランプレンの輸送や保存についての問題が取り上げられました。ランプレンは湿度が高いと溶けてしまうのです。そしてダブソンとリファンピシンは別々の容器で保管しなければならないため現場で薬を取り扱う人々や患者にとり、MDTの取り扱いが難しいものでした。度重なる話し合いを経て、湯浅先生が家族計画のピルのようなMDTブリスターパックを提案されたのでした。

ランプレンはブリスターパックを作る機械にダメージを与え、次に別の用途に使う際には、すっかり洗浄しなければならないことなどから、製品化の話は簡単には進みませんでした。しかし、湯浅先生は2つの企業にブリスターパックの製造を依頼することに成功しました。最初にフィリピン保健省に届けられたブリスターパックは、笹川記念保健協力財団からの資金援助のおかげでした。

湯浅先生のWHOコンサルタントとしての仕事の中には、MDTを使ったハンセン病対策活動のモニターがありました。MDTで治療中の多菌性のハンセン病患者が隔離されている小屋を湯浅先生と訪ねた後、ほかにも新規患者がいるかもしれないので、もう少し村を見てほしいと頼んだのです。先生は快く受けてくださり、朝の慌ただしい時間の家々を訪ねて回りました。すると、3軒の家からさらに、まだ治療を受けていない3人の患者が見つかりました。湯浅先生の「こんなに治療を受けていない患者がまだいるとは。もう、未治療の患者はすべて、保健師が見つけているものと思っていた」という言葉に対し、私は「驚くことではありません。マクタン島（セブ）では、ハンセン病が蔓延しています。セブのどこでも、同じような状況でしょう。だからこそ、私たちは新規患者発見のための戦略を見直す必要があったのです。それに、MDTでの治療が始まれば、らい反応や、副作用、途中で治療をやめてしまう人など、思わぬ問題が山積みになることでしょう。それこそが村レベル、市や地域、県レベルでの活動の指揮監督を続けなければならない理由なのです」と

お答えしました。

もう1つ忘れられない思い出は、湯浅先生と一緒に、セブ島の北部のサトウキビ畑の真ん中を、治療中の老人を探して歩いたことでしょうか。老人は今にも壊れそうな竹小屋で暮らしていました。娘が隔離のためにその小屋を建てたのです。湯浅先生はその娘に向かって問いかけました。「あなたは、年老いた病気の父親を、飢えているかもしれないというのに、水もトイレも何もない所に、たった1人置き去りにするのですか?」と。立ち去る前、湯浅先生は200ペソを出してその老人に渡しました。

湯浅先生とは、フィリピン北部のイロコスノルテ州にも、何度か訪れました。3、4日の旅でも、万能のクリーム色のバロンシャツ1枚と、黒かグレーのズボン1本と、黒い靴下といういでたちで、それをご自分で全て洗ってからお休みになっていました。イロコスのスパイシーなソーセージとガーリックのきいた焼き飯が大好きで、イロコスの野菜の煮込みや大好物のマンゴーをはじめ、出されたものは何でも喜んで召し上がりました。

湯浅先生は、偉大で、寛大で、献身的な人道主義者でした。笹川記念保健協力財団やWHO、ヨーロッパやアメリカのNGOなど、ハンセン病制圧を目的とする組織が、ハンセン病ワーカーの育成や地域・住民の啓発、抗ハンセン病薬の配布や、活動のモニターや監督、回復者のリハビリなど様々な活動を通して、その目的達成のために共に働くことができたのも、先生という人がいたからです。世界中探しても、先生のような医師や医療従事者は多くはいないでしょう。

私の記憶が続く限り、湯浅先生は心の中に生き続けるでしょう。偉大なるリーダーであり、多くの人々の恩師であり、関わった皆から愛される先生。穏やかで、柔らかな話し口調の飾り気のない医師。

湯浅先生、数えきれないほどの素晴らしい思い出をありがとうございました。

ジョセフ・ロバートソン

オーストラリアクイーンズランド大学講師

初めて湯浅先生にお目にかかったのは2001年のことです。それ以来、先生には幾度もお目にかかり、お話をさせていただきましたが、その中で、笹川記念保健協力財団の医療部長に就任される前のことも聞かせていただきました。

若き日の湯浅先生は極めて優秀だったのでしょう。東京で1958年に開催された第7回国際ハンセン病学会の後、ジェイムズ・ロス・イネス博士がエジンバラ大学医学部進学の手助けをしました。湯浅先生は、ロス・イネス博士がエジンバラ大学医学部の学部長に出した手紙を大事に保管していました。その手紙には、「湯浅氏はハンセン病を変えるだろう」と書かれていました。湯浅先生にとって、ロス・イネス博士は個人的な師匠であり、ロス・イネス博士にとって湯浅先生は息子も同然だったのです。ロス・イネス博士は湯浅先生をハンセン病団体BELRA/LEPRAで、アフリカの医師の研修をさせようと思っていたようです。しかしその前にロス・イネス博士が亡くなり、スタンレイ・ブラウン博士が、ロス・イネス博士の「師匠」の座を継ぐことになりました。湯浅先生は後年「ロス・イネス博士は死の床からスタンレイ・ブラウン博士に、自分のことをよくよく頼むとお願いしてくれました。ブラウン博士は国際ハンセン病学会の財務担当をはじめ、ハンセン病関係のさまざまな仕事をしており、大変に多忙であったにもかかわらず、おそらくはロス・イネス博士の期待した以上に私に目をかけてくれました。この2人なしに、今日の私はありませんでした。2人には感謝してもしきれません」と言っていました。

ブラウン博士も同じくイギリス本拠の英国ハンセン病協会(TLM)で活動をしていましたので、湯浅先生がその関係でネパールで働くことになったのは当然の流れでしょう。ネパールでの活動に先立ち、形成手術の研修を受ける必要がありましたが、エチオピアのアディスアベバ、南インドのカリギリ、または香港という選択肢がありました。最終的には香港で、グレース・ウォレン先生の下で研修を受けることになったのです。香港での思い出をよく話されていました。ちょうどその頃、奥様の妊娠が分かり、奥様は新生児と82歳の義父の面倒を見ながら日本で暮らすことになりました。湯浅先生がネパールのアナンダバン病院に到着したのは1971年12月のことでした。

湯浅先生はアナンダバンで引退するまで働くつもりもあったようです。1975年9月にはWHOによるネパールのハンセン病対策5か年計画に関わりしました。これはハンセン病患者が多数いる国で計画された、初めての国レベルのハンセン病対策計画で、これに参加したことは、笹川記念保健協力財団の医療部長としての湯浅先生のキャリアに大いに貢献したことでしょう。

笹川記念保健協力財団は設立から1年半後に、医療部長というポストで湯浅先生を迎え入れることになります。紀伊國先生から湯浅先生に話をされた際には、5年と言ったともいいますが、湯浅先生は笹川記念保健協力財団で30年以上にわたって、世界で活躍をすることになりました。

湯浅先生を知る人は誰でも、湯浅先生の仕事にける情熱を知っているでしょう。スタンレイ・ブラウン博士やロバート・コ克蘭博士のように、自分の努力の対価は求めず、ただ、苦しんでいる人がいるこの世をほんの少しずつでもよくしている、という想いだけで、自分のなすべきことをなし続ける人々が持っている情熱を、湯浅先生も持っていました。

WHOやILEP(世界ハンセン病団体連合)を通じて、湯浅先生の目的意識は確実に世界を変えていきました。生涯をかけてハンセン病に関わり続けた湯浅先生は、ほかの多くの人と同じく、情熱を持ち、ハンセン病のない世界をめざして進み続けましたが、その穏やかな物腰と思慮と意志の固さは、際立ったものでした。

湯浅先生のご逝去は、あまりにも大きな喪失です。ご冥福を心よりお祈り申し上げます。



カービルにて。湯浅先生(前列最左)と師匠スタンレイ・ブラウン博士(前列左から2番目)

湯浅 洋先生 — 生涯の友

南アフリカのロベン島での国際会議で撮られた湯浅先生とクリント・アニャビエサの写真は、ハンセン病を患った人たちを友としてパートナーとして見てきた穏やかな人物の精神と尊厳と思いやりを描き出していると思います。

湯浅先生は、社会から疎外される病を持って生きるということをよくご存じでした。若くして結核を発病した湯浅先生は、ニューヨーク市のサラナク湖のトルドー療養所に入所されました。この体験が先生のその後の生き方に大きな影響を与え、結核と同様に疎外される病であるハンセン病を持って生きることを意味を、本当の意味で理解されていたことは言うまでもないでしょう。

2002年にダミアン・ダットン賞の受賞スピーチで、1946年に初めて長島愛生園を訪問された時のことを話されました。そのスピーチで、先生は出会われた2人について話をされました。その1人は、先生が「少なくとも日本における、初めての社会復帰者」と言われた鈴木重雄さんです。1970年代に長島愛生園から社会復帰したのちに、故郷で町長選に立候補し、わずかな差で落選をしたという伝説的な人でした。

1957年に湯浅先生は長島愛生園に戻りました。日本のハンセン病療養所で唯一の高校であった新良田教室で英語を教えるためです。そこで英語を学んだ一人が、湯浅先生の生涯の友となった森元美代治さんです。

私が初めて湯浅先生にお目にかかったのは1973年、ネパールのアナンダバン病院に続く道でのことでした。当時の私は大学を卒業し、友人とあちらこちらを旅していました。父がハンセン病専門家で、世界のハンセン病の施設に知り合いがいることから、旅行先のハンセン病特別病院に父からの手紙を届けてもらっていたのです。ちょうどクリスマスの時期で、卒業したてでお金もない私たちは、クリスマスカードと10ドルが届いていることを期待して、アナンダバンに行くところでした。

カトマンズで自転車を借りて、何時間もこいだ挙句に、絶対にアナンダバンまで自転車では行けない、ということによるやく気が付き、あきらめて帰ろうとしたところにジープが現れました。ジープに乗る湯浅先生は、私たちにクリスマスカー

ドを渡してくれたのです。その後もよくこの時の話をしたものです。湯浅先生は常にアドバイスや協力をしてくれる生涯の友となりました。

1988年には、オランダのハーグで国際ハンセン病学会が開かれました。それまでの国際ハンセン病学会は、「ハンセン病」学会と言いながらも、病気を体験した人たちが発言する場はありませんでした。湯浅先生は、世界ハンセン病団体連合であるILEPのメンバー団体に当事者の参加支援を呼びかけてくださいました。2016年、中国の北京で開かれた国際ハンセン病学会には、40人以上の当事者が参加しました。湯浅先生は直前に亡くなれましたが、先生の心は、間違いなく私たちと共にありました。

2016年の国際ハンセン病学会での討論の一つに「参加」と「共生」がありました。誰かを打ち合わせや会議などに招待して参加させることは簡単でも、そもそも壁をなくし、誰もが共に平等に生きることを可能にすることは困難です。他者が自分と平等であり、友であり、パートナーであると理解しなければ共生はありません。そして湯浅先生は、共生が何なのかを心から理解していた人でした。

湯浅先生と出会い、私の人生は豊かなものとなりました。湯浅先生の力添えで可能となったハンセン病回復者のネットワークであるIDEAの誕生と発展と共に、世界の数多くの人々が、湯浅先生の魂に触れ、尊厳を取り戻してきたことに、あらためて感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。



南アフリカロベン島で、
クリント・アニャビエサと



二人で撮った記念の写真。
湯浅先生(左)、ロー氏(右)

湯浅洋先生追悼集に寄せて

喜多 悦子

公益財団法人笹川記念保健協力財団理事長

財団の長いハンセン病関連事業の歴史の多くは、湯浅洋先生のそれと重複します。その中、私と先生の接点は、ほんの僅かです。最初にお目にかかったのは、1992年6月、その前年に短期学んだジョーンズホプキンス大学公衆衛生大学院学長が財団を表敬された際の案内を請われ、三田の笹川記念会館を訪問した際、先生と現紀伊國献三会長にお目にかかりました。それが、私の財団ハンセン病事業との接点の最初でもありました。その後、ご縁を得て、理事長職を受けさせていただきました、着任の前年度（2012年度）、見習いの月に一度の非常勤出勤を許されていました。当時、先生も時折のご出勤でしたので、私どもは、一つのコンピューターを共用していました。先生が打たれたキーボードをたたきながら、まだ見ぬハンセン病に想いを馳せたものでした。先生との邂逅はほんのわずかに過ぎません。

そして、巨人は去ってしまいました。

先生が夢見られたハンセン病制圧を次世代に託されて。

それを追及することをお約束します。

先生のご冥福を心から祈ります。



ネパールのアナンダバン病院の歴代院長を語るボードには、今も湯浅先生の名前が残る。（1974年）

表紙写真：ドクターズマガジン 2001年2月号より

公益財団法人 笹川記念保健協力財団

〒107-0052 東京都港区赤坂1丁目2番2号 日本財団ビル5階

電話：03-6229-5377（代表） FAX：03-6229-5388

EMAIL：smhf@tnfb.jp

URL：http://www.smhf.or.jp/

2016年11月


Sasakawa Memorial
Health Foundation
笹川記念保健協力財団

Supported by

THE NIPPON
FOUNDATION